

## 日本人フランス語学習者の自由会話における談話標識 *bon* の一考察

清宮 貴雅

川口 裕司

### 1. はじめに\*

近年、日本人フランス語学習者の使用する談話標識の研究が、少しずつではあるが進みつつある。しかしながら、英語と比べるとその数は圧倒的に少なく、分析されている談話標識の種類も限られる。そこで本研究では、日本語を母語とするフランス語学習者が使用する談話標識としての *bon* にどのような特徴があるのかを、フランス語母語話者の使用との比較から明らかにする。

### 2. 談話標識としての *bon*

#### 2.1. 談話標識

談話標識（以下 DM）とは、話し手が、自分の意図するメッセージの一貫性だけでなく、このメッセージや対話者に対する態度も伝える構造と相互作用の標識である(Crible and Degand 2019: 3-4)。DM は話し手が伝達しようとする発話メッセージ [命題内容] の周辺に位置し、聞き手がその内容を正しく理解するように促す機能を有する。また、DM は多くの場合曲用などにより形が変化することはない。さらに命題内容には関与せず、統語レベルでは任意である(Dostie 2009: 202)。すなわち、談話標識が発話中であってもなくても、発話の内容は変化せず、文としても成立する。たとえば(1)の発話において、A の使用する *bon* は、形容詞としての働きは示さず（したがって、「良い」という意味は持たず）、また(1')のように *bon* がなくとも発話の意味は変化しない。

(1) A. eh ben c'est l'attitude de Nadia

B. ouais mais lui c'est différent puisque lui il était un il parlait en tant que vendeur

A. oui mais Nadia, elle, *bon* elle *bon* elle te parle pas en tant que vendeuse mais

(Hansen 1995 : 20-21)

(1') A. oui mais Nadia, elle, elle, elle te parle pas en tant que vendeuse mais

フランス語にはさまざまな談話標識が存在するが、本研究ではその中でも *bon* を分析の対象とする。*bon* を分析の対象とした理由は次の2つである。1つ目の理由として、談話標識の中でも *bon* の使用数が比較的多い点である。フランス語の2つの話ことばコーパス Corpaix (1,050,000 語) と CRFP (440,000 語) で確認される談話標識ごとの生起数をリスト化した Chanet (2004)によれば、*bon* は *mais*、*donc*、*alors* に続き4番目に多く使

\* 本研究は JSPS 科研費 JP20K00566、JP20H01279 の助成を受けたものです。

用される。2つ目の理由として、談話標識として使用される他の語と比較して、*bon* は談話標識としての使用なのか、そうではないのかの判別が比較的容易な点がある。副詞や接続詞が談話標識として働く場合、それらの語が談話標識なのか、単なる副詞もしくは接続詞なのかの判断は容易ではない。一方、もともと形容詞である *bon* については、談話標識として機能している場合（すなわち形容詞として機能していない、または統語上形容詞として働くには不自然な位置で使用されている場合）と、形容詞として機能している場合（すなわち、置かれている位置や性数の一致が見られる場合など）とで識別が容易である。これらの点から、本研究では *bon* を分析の対象とした。

## 2.2. *bon* の先行研究

フランス語母語話者における談話標識の *bon* の研究は数多く存在する。ここでは、本研究を遂行するにあたって重要な研究であると考えた Hansen (1995, 1998)、Peltier & Ranson (2020)、Gilbert (2019)を概観する。

Hansen (1995)は、*bon* には大きく2つの異なる働きがあると述べている。1つ目は、発話者が対話者に対して、内容、発話行為やシチュエーションを受け入れたことを提示する働きである。この働きをする *bon* は、通常発話頭で使用される。(2)の発話では、Aの質問をBが遮っており、この介入はAのポジティブフェイスを脅かす行為である。Aの発話における *bon* は、発話者Aが、Bの発話内容及び自分が Claude Estier の後に発言するという状況を受け入れたことを示している。Hansen (1998: 253) は、(2)における *bon* を *interjective use* と呼び、主にターンの頭で使用されるとしている。このような *bon* は話し手と聞き手のインタラクションに関与すると Hansen は述べている。

(2) A. est-ce que(:)

B. alors attendez si vous permettez (René/ si vous permettez) Henri Amouroux (uh:)

j'aimerais que Claude Estier d'abord réponde et ensuite vous interviewez

A. *bon*, d'accord, très bien [VSI p.a] (Hansen 1995: 26 ; 1998: 253)<sup>1</sup>

2つ目は、発話者が対話者に対して、局所的に望ましくない発話内容、発話行為、発話状況を受容することを促す働きである。このような働きを持つ *bon* は発話中や発話末で使用される。(3)における *bon* がその例であり、ここで使用される *bon* は、(2)の *bon* と比較してより認知的機能を有する。話し手にとっては言い直しという望ましくない発話状況を相手に受け入れてもらえるよう求める働きがあり、Hansen (1998: 254) はこのような使用を *proper discourse marking use* と呼んでいる。

---

<sup>1</sup> 丸カッコ内は、Hansen (1998) でのみ記述されている発話である。

(3) ...alors au niveau d'Amama actuellement y a plus rien *bon* avec les b(/ les/) je crois qu'y a des circuits qui y vont mais nou(:)s *bon* on n'y est pas allés [VE:57]

(Hansen 1995: 30 ; 1998: 254)<sup>2</sup>

Peltier & Ranson (2020)は、それまで行われてきた先行研究での *bon* の機能をまとめ上げ、さらに新しい機能を追加した上で、コーパス内における *bon* の生起数と出現位置を分析した。

<b>Fonctions textuelles</b>	
d'ouverture	
nouveau thème	Barnes (1995 : 815), Hansen (1998a : 255), Brémond (2003 :73-74), Skattum (2012 : 210)
prise de thème	Skattum (2012 : 210)
nouvelle voix	« changement de point de vue » Barnes (1995 : 816)
de continuation	
sous-thème	Winther (1985 : 89), Barnes (1995 : 816), Brémond (2003 : 75), Beeching (2007 : 81), Beeching (2011 : 94), « étapes ou séquences narratives » Skattum (2012 : 211)
résultat	nouvelle fonction
supplément	« parenthèse explicative » Barnes (1995 : 815), « précision » Skattum (2012 : 212) « confirmation » Lee et al. (2019 : 2), « explicatif [parenthetical] » Lee et al. (2019 : 2)
élément additif	nouvelle fonction
d'autres fonctions textuelles	
reprise de thème	Barnes (1995 : 815, 816), Brémond (2003 : 73-75), Hansen (1998a : 255)
formulation	Barnes (1995 : 814-815), Beeching (2007 : 80), Beeching (2011 : 95), Skattum (2012 : 213-14) «reformulation » Eshkol-Taravella & Grabar (2018 : 4), Grabar & Eshkol-Taravella (2016 : 9) « hésitation » Winther (1985 : 89), Lefevre (2011a : 226), Lefevre (2011b :18) « gagner du temps » Crible (2017 : 137), Beeching (2009 : 220), Lee et al. (2019 : 2)
<b>Fonctions attitudinales</b>	
contraste	« autocorrection » Skattum (2012 : 212), « réparation » Beeching (2009 : 220) « opposition » Crible (2017 : 283)
résignation	nouvelle fonction « concession » Beeching (2009 : 220)

図 1. Peliter & Ranson (2020)による *bon* の分類

図 1 は、彼女らが分析に使用した *bon* の分類表である。『テキスト的機能 (fonctions textuelles)』には、『開始 (d'ouverture)』、『継続 (de continuation)』、『他のテキスト的機能 (d'autres fonctions textuelles)』の3つの下位分類があり、それぞれの下位分類がさらに細かい機能から成る。『テキスト的機能』の *bon* には « nouveau thème » から « formulation » までの合計 9 つの機能が含まれる。これとは別に、談話における相互作用的機能を『態度的機能 (fonctions attitudinales)』とし、ここには« contraste » と « résignation » の2つの機能が含まれる。出現位置については、ターン頭、ターン中+発話頭、ターン中+発話中、

<sup>2</sup> 同上。

発話末の 4 種類で分析を行った。分析で使用されたコーパスは 9.5 時間の話ことばコーパスであり、2005 年に Montpellier、2006 年に Rognes で録音されたものである。このコーパス内における談話標識としての *bon* の生起数は 277 回である。分析の結果、彼女らは、発話内の *bon* の使用位置とその機能との間に一定の傾向は見られるが厳密な相関関係は存在しないと、さらに *bon* の使用位置は、話し手が話題転換をしたい、話題などに同意を表明したいと感じるタイミングに左右されると結論付けている。

Gilbert (2019) は、上述した Peltier & Ranson (2020) と同じコーパスの一部を使用し、*bon* の共起の種類 (=n-gram の種類) と、それらの出現位置を分析した。出現位置については、ターン頭、ターン中、ターン末、ターン全体 (*bon* だけでターンが構成される) の 4 種類に分類した。*bon* の生起数は 231 回であり、出現位置については、ターン中が 159 回と最も多く、次いでターン頭が 62 回、ターン末が 9 回、ターン全体はわずか 1 回であった。231 個の *bon* のうち、106 個が *bon* の単独使用 (1-gram) であり、残りの 115 個は他の DM と共起した *bon*、すなわち *bon* を含む n-gram である。共起する DM や n-gram の種類についてここでは詳しく述べないが、最大で *après euh après bon ben après* のように 6 要素の連結がコーパス内で確認された。n-gram の観点からは、1-gram が 106 回と最も多く、その次が 2-gram (*alors bon* など) の 62 回であり、連結する要素が多くなるにつれ出現数が減少するという特徴が見られる。そして連結の種類については、*mais bon* のような別の形態が *bon* に先行する種類 (以下 *Xbon*)、*bon ben* のような別の形態が *bon* に後続する種類 (以下 *bon Y*)、そして *donc bon mais* のような *bon* の前後に別の要素が連結する種類 (以下 *Xbon Y*) の 3 種類が存在する。

フランス語非母語話者における談話標識の *bon* の研究としては、Deng (2022) がある。彼女は、フランス在住の中国語母語話者のインタビュー会話 (30 時間) における *bon*、*ben*、*enfin*、*fin* の使用頻度を分析し、フランス語母語話者のデータとの比較を行った<sup>3</sup>。その結果、中国語母語話者のデータでは、DM ではない *bon* の使用が 1824 回 (86.54%)、DM としての使用が 284 回 (13.46%) であり、母語話者データと比較して DM 以外の使用が非常に多いことを指摘している。

これらの先行研究から、まず、談話標識としての *bon* は出現しやすい位置と、そうでない位置があることが明らかとなっている。Peltier & Ranson (2020) や Gilbert (2019) といった量的研究から、*bon* は発話中 > 発話頭 > 発話末の順に出現しやすいと言える。また、機能については、1 つだけではなく複数 (少なくとも 2 つ以上) の異なる機能があるといえる<sup>4</sup>。そして、談話標識 *bon* は他の DM と連結することがあり、最大 6 語と共起するが、連結要素数が増えるにつれ生起数は減少する傾向にある。最後に、中国語母語話者の場合、DM ではない *bon* の使用が 8 割を占めており、DM としての使用は少ないという傾向が見られる。

<sup>3</sup> フランス語母語話者のデータには、Chanet (2004) が使用された。

<sup>4</sup> ただし、Peltier & Ranson (2020) の分類は機能を細分化しすぎており、この分類基準を用いた他の研究者による分析の再現可能性は低いとも考えられる。

### 3. 研究目的

先述した先行研究は、フランス語母語話者や中国語母語話者における *bon* の特徴である。一方、日本語を母語とするフランス語学習者における談話標識としての *bon* の研究は全くと言っていいほど行われていない。そこで本研究では、先行研究で行われた分析を踏まえ、次の3つの観点から、フランス語母語話者データの比較を通して、日本人フランス語学習者の使用する *bon* にどのような特徴があるのかを明らかにしていく。

1. DM の *bon* と DM ではない *bon* の生起数
2. *bon* と共起する要素と n-gram の種類
3. DM としての *bon* の出現位置及び生起数

### 4. 分析方法

#### 4.1. コーパス<sup>5</sup>

本研究では、学習者のコーパスには InterPhonologie du Français Contemporain プロジェクト (Detey & Kawaguchi 2008) の話ことばコーパス IPFC-J を使用した。学習者のレベルはおおよそ CEFR の B2 である。このコーパスにはさまざまなタスクが含まれるが、その中でも自由会話のみを分析の対象とした。ファイル数は5大学から7ファイルずつを使用したため、合計35ファイル、51,807トークンが分析対象である。また、比較対象としてフランス語母語話者のコーパスには東京外国語大学と Aix-Marseille 大学が共同で構築した話ことばコーパス、Spoken French Corpus (Aix) (古賀、秋廣、川口 2012) を使用した。学習者コーパス同様、自由会話を分析の対象とした。母語話者と学習者コーパスが同規模のコーパスになるよう、3ファイル、48,743トークンを分析対象とした。

表1. 使用コーパス

	学習者コーパス	母語話者コーパス
コーパス	IPFC-J	Spoken French Corpus (Aix)
レベル	CEFR B2	母語話者
タスク	自由会話	自由会話
使用ファイル数	35	3
総トークン数	51,807	48,743

<sup>5</sup> 本論文内で引用した学習者コーパスと母語話者コーパスからの例内で使用される記号とその働きについては次のとおり

# : ポーズ

(.) : 発音されていない文字 例) i(l) は /i/ ではなく /i/ と発音されている

{...} : 右方転移もしくは左方転移 例) Il vous va très bien, {ce pantalon}. 「それはあなたによく似合うね、そのズボン。」

<...> : 重なっている発話

## 4.2. 手順

まず *bon* の生起数を Antconc v.4.2.4 を使用して自動的に数え上げた。その後、*bon* が生起する文を全て観察し、文脈から *bon* がそれぞれ DM なのかそうではないのかを判断し分類した。次に、DM としての *bon* が 1-gram なのか、n-gram なのかの分類を行った。先行研究においても述べられているように、*bon* は他の語と共起して使用されることが多いためである。この分類では、音声データではなく転写データを使用し、何かしらの記号によって書き分けられているかどうかを判断基準とした。(4)と(5)は、母語話者コーパスからの例である。なおこれらの発話は、同じ人物によって転写されている。

(4) NV140 – Mais je vais retourner voir M.Breton. Je vais aller voir le prof là, mais bon, i(l) (ne) veut pas m’écouter *alors, bon.* (04\_CA\_NV\_100223)

(5) CA525 – Alors que bon, ee {un symbole ee chinois} ça peut ça peut représenter un mot, c’est ça qui est un peu plus, *alors bon* {les les chinois} quand ils lisent les quand ils lisent des choses et c’est ee. (04\_CA\_NV\_100223)

(4)の発話では *alors* と *bon* がヴィルギュルによって分けられているのに対し、(5)の発話ではヴィルギュル無しの *alors bon* である。同一人物が転写していることを考慮すれば、(4)の発話における *alors, bon* は、意図的に分けられていると考える方が自然である。このことから本研究では、(4)の発話の *alors, bon* のようなヴィルギュルによって書き分けられている場合は 1-gram の *bon*、(5)の発話のように書き分けられていない場合は n-gram (ここでは 2-gram) として分類した。

出現位置については、ターンは関係なく、発話頭、発話中、発話末で分類を行った。出現位置についても転写データに基づき分類を行った。(6)と(7)は学習者コーパスからの例である。例えば発話頭というのは、(6)における HK1 « *ah bon on peut faire euh* » における *ah bon* の場合である。発話中というのは、先述した(5)における *alors bon* のような、一連の発話の中で使用される場合である。そして、発話末というのは、(7)における RI1 « *au Burkina Faso > # d’abord je vais # j’allais parler euh de Lisbonne mais bon* » での *mais bon* のような、発話の最後に現れる *bon* のことを指す。

(6) HK1 - <èh !> Saga ?

AT1 - oui peut-être Saga #

HK1 - *ah bon* on peut faire euh

AT1 - <mh>

HK1 - s- on fait on peut faire du ski à Saga ? (jpfu1at1hk1\_11)

(7) RI1 - < au Burkina Faso > # d’abord je vais # j’allais parler euh de Lisbonne *mais bon*

MO1 - < ah désolée # désolée oui >

RI1 - < comme t’as choisi euh # pardon > # *bon* c’est bon (jpto2ri1mo1\_11)

n-gram の出現位置ごとの生起数を学習者コーパスと母語話者コーパス間で比較するため、最終的に生起数を 10 万語当たりの相対頻度に換算した。

## 5. 分析結果

### 5.1. DM の *bon* と non-DM の *bon* の割合

学習者コーパスでは、合計 332 回 *bon* が生起していた。このうち 210 個 (63%) が DM として使用されていた *bon* であり、残りの 122 個 (37%) は DM 以外の使用 (non-DM) である。母語話者コーパスでも、合計 323 回 *bon* が生起しており、生起数は学習者コーパスと大きな差は見られない。DM としての使用は 235 回 (73%) であり、学習者よりも若干ではあるが多い。また non-DM の使用数は 88 回 (27%) である。若干の違いはあるが、学習者コーパスと母語話者コーパス間では、DM としての使用数と non-DM としての使用数には大きな差はないと言える。

表 2. *bon* DM と *bon* non-DM の生起数 (10 万語当たりの相対頻度)

	学習者コーパス	母語話者コーパス
<i>bon</i> DM	210 (63%)	235 (73%)
<i>bon</i> non-DM	122 (37%)	88 (27%)
合計	332 (100%)	323(100%)

### 5.2. 学習者における *bon* の共起とその生起数

ここから、DM としての *bon* の詳細を見ていく。まず学習者コーパスにおける *bon* の連結数とその生起数については、2-gram が 139 回 (66.2%) と最も多かった。これは後述するが、*ah bon* の生起数が非常に多いことが理由として挙げられる。次いで 1-gram の 55 回 (26.2%)、3-gram の 12 回 (5.7%) となっている。4-gram と 5-gram はそれぞれ 2 回ずつ確認された。出現位置については、発話頭が 113 回 (54%) と最も多く、そのうちのほとんどが 2-gram である (生起数 97 回)。その次に、発話中での使用が 91 回 (43%) であり、1-gram と 2-gram が大半を占めている。発話末での生起数は 6 回 (3%) であり、1-gram、4-gram、5-gram は一度も生起していない。

表 3. 学習者コーパスにおける *bon* (n-gram) の生起数と割合

	発話頭	発話中	発話末	合計
1-gram	14	41	0	55 (26.2%)
2-gram	95	40	4	139 (66.2%)
3-gram	4	6	2	12 (5.7%)
4-gram	0	2	0	2 (0.95%)
5-gram	0	2	0	2 (0.95%)
合計	113 (54%)	91 (43%)	6 (3%)	210 (100%)

表4は、学習者コーパスにおいて確認された n-gram の種類の出現位置ごとの生起数をまとめたものである。n-gram の種類は、1-gram を含め 19 種類確認された。学習者コーパスで最も多いのは 99 回生起した *ah bon* である。DM としての *bon* の 47% を占めており、2 番目に多い 1-gram の *bon* の約 1.7 倍の生起数となっている。*ah bon* は発話末以外で確認されたが、特に発話頭での使用が 87 回となっており、発話頭での使用の 77% を占める。2 番目に使用頻度の高い 1-gram の *bon* は、合計 55 回 (26%) 使用されており、特に発話中で 41 回と最も多く出現している。次いで *euh bon* と *mais bon* の 10 回 (4.8%)、*enfin bon* の 6 回、*et puis euh bon* の 4 回である。それ以外の n-gram の生起数は 2 回である。

表4. 学習者コーパスで見られた *bon* (n-gram) の種類×出現位置ごとの生起数

種類	位置				順位
	発話頭	発話中	発話末	合計	
<i>ah bon</i>	87	12	0	99 (47%)	1
<i>bon</i>	14	41	0	55 (26%)	2
<i>euh bon</i>	0	8	2	10 (4.8%)	3
<i>mais bon</i>	2	6	2	10 (4.8%)	3
<i>enfin bon</i>	4	2	0	6 (2.9%)	5
<i>et puis euh bon</i>	0	4	0	4 (1.9%)	6
<i>bon ben</i>	0	2	0	2	
<i>bon donc</i>	0	2	0	2	
<i>bon du coup</i>	0	2	0	2	
<i>bon en fait</i>	2	0	0	2	
<i>parce que bon</i>	0	2	0	2	
<i>bon euh mh</i>	0	2	0	2	
<i>comme euh bon</i>	0	2	0	2	
<i>donc euh bon</i>	0	0	2	2	
<i>donc là bon</i>	2	0	0	2	
<i>mais bon mais</i>	0	2	0	2	
<i>mh ah bon</i>	2	0	0	2	
<i>euh bon ben mh</i>	0	2	0	2	
<i>euh ben mais bon euh</i>	0	2	0	2	
合計	113 (54%)	91 (43%)	6 (3%)	210 (100%)	

### 5.3. 母語話者における *bon* の共起とその生起数

母語話者コーパスにおける *bon* の連結数とその生起数については、2-gram が 147 回 (62%) と最も多かった。次いで 1-gram の 76 回 (32%)、3-gram の 12 回 (5%) である。なお、3-gram は発話中での使用は確認されなかった。学習者コーパスとは異なり、4-gram 以上は見られなかった。出現位置については、発話中が 122 回 (52%) と最も多く、その次に発話頭が 97 回 (41%) となっている。発話末での生起数は 16 回 (7%) と少ないが、学習者と異なり 1-gram も発話末での使用が確認された。

表 5. 母語話者コーパスにおける *bon* (n-gram) の生起数と割合

	発話頭	発話中	発話末	合計
1-gram	39	35	2	76 (32%)
2-gram	48	87	12	147 (62%)
3-gram	10	0	2	12 (5%)
合計	97 (41%)	122 (52%)	16 (7%)	235 (100%)

表 6 は、母語話者コーパスにおいて確認された n-gram の種類の出現位置ごとの生起数をまとめたものである。n-gram の種類は、1-gram を含め 21 種類である。最も多いのは 1-gram の *bon* の 76 回 (32%) である。2 番目に多かったのは *mais bon* の 67 回 (29%) である。次いで、*et bon* と *parce que bon* が 20 回 (9%)、*ah bon* が 10 回、*enfin bon* が 8 回、*alors bon* と *alors que bon* が 4 回生起していた。それ以外の n-gram は生起数 2 回である。なお、最も長い n-gram は *alors enfin bon* や *après bon voilà* といった 3-gram である。

表 6. 母語話者コーパスで見られた *bon* (n-gram) の種類×出現位置ごとの生起数

種類	位置				順位
	発話頭	発話中	発話末	合計	
<i>bon</i>	39	35	2	76 (32%)	1
<i>mais bon</i>	18	39	10	67 (29%)	2
<i>et bon</i>	4	14	2	20 (9%)	3
<i>parce que bon</i>	4	16	0	20 (9%)	3
<i>ah bon</i>	8	2	0	10 (4%)	5
<i>enfin bon</i>	8	0	0	8 (3.4%)	6
<i>alors bon</i>	2	2	0	4 (1.7%)	7
<i>alors que bon</i>	2	2	0	4 (1.7%)	7
<i>bon alors</i>	2	0	0	2	
<i>bon après</i>	0	2	0	2	
<i>bon ben</i>	0	2	0	2	

<i>bon finalement</i>	0	2	0	2	
<i>bon là</i>	0	2	0	2	
<i>bon mais</i>	0	2	0	2	
<i>et puis bon</i>	0	2	0	2	
<i>alors enfin bon</i>	2	0	0	2	
<i>après bon voilà</i>	2	0	0	2	
<i>bon et alors</i>	2	0	0	2	
<i>bon et au final</i>	2	0	0	2	
<i>et puis comme bon</i>	2	0	0	2	
<i>mais bon hein</i>	0	0	2	2	
合計	97 (41%)	122 (52%)	16 (7%)	235 (100%)	

#### 5.4. 学習者コーパスと母語話者コーパスの比較

学習者コーパスと母語話者コーパスを比較すると、1-gram の *bon* の出現位置が大きく異なる。学習者コーパスでは *bon* の約 75% が発話中で使用されていた。一方母語話者コーパスでは、発話頭での使用が約 51%、発話中での使用が約 46% であり、学習者コーパスとは異なる傾向を示した。

学習者コーパスでは全 19 種類の n-gram が確認されたが、そのうち 8 種類が *ah*、*euh*、*mh* といったフィラーと共に起していた。一方、母語話者コーパスでは *ah*、*hein* との共起は見られたが、学習者ほど種類に富んではいなかった。

出現位置に関しては、若干の違いではあるが、学習者コーパスでは発話頭が 54% と最も多く、母語話者コーパスでは発話中が 52% と最も高かった。発話末での使用は両コーパスで低水準となっている。

##### 5.4.1. *X bon*

*bon* の前に別の要素が付いている (*bon* が一番後ろの要素となる) n-gram は、学習者コーパスと母語話者コーパスで、ともに 10 種類確認された。そのうち、両コーパスで共通していた n-gram は 4 種類である。

表 7. 両コーパスで見られた *X bon* の種類と出現数

学習者のみ	学習者と母語話者に共通	母語話者のみ
<i>comme euh bon</i> *	<i>ah bon</i> (99/10)	<i>alors bon</i> (4)
<i>donc euh bon</i> *	<i>enfin bon</i> (6/8)	<i>alors enfin bon</i> *
<i>donc là bon</i> *	<i>mais bon</i> (10/68)	<i>alors que bon</i> (4)
<i>et puis euh bon</i> (4)	<i>parce que bon</i> (* /21)	<i>et bon</i> (21)
<i>euh bon</i> (10)		<i>et puis bon</i> *
<i>mh ah bon</i> *		<i>et puis comme bon</i> *

表7は*Xbon*の種類をまとめたものである。生起数が2回以下の*n-gram*には\*を記し、3回以上生起している場合には生起数を括弧内に記した。学習者コーパスにおいて特筆すべき*n-gram*は、99回生起した*ah bon*である。母語話者コーパスの10倍以上生起しており、学習者コーパスで確認された*bon*のおおよそ半分を占めている。この*ah bon*の使用頻度の高さには何か原因があると考えられる。*ah bon*の使用頻度の高さが日本語母語話者特有と言えるのかを調べるため、日本で出版された初級レベルの教科書11冊を無作為に選び、*ah bon*を含むDMとしての*bon*が使用されているのか、また発話内のどの位置で使用されているのかを分析した。

11冊のうち、会話文が含まれるものは7冊である。それらのうち、6冊においてDMとしての*bon*の使用が確認された。DMとしての*bon*は合計13回使用されており、1-gramの*bon*が3回、2-gramの*ah bon*が10回であった<sup>6</sup>。教科書2と教科書6以外では、1-gramの*bon*よりも前の課で*ah bon*が使用されていた。

表8. 6冊の教科書におけるDMとしての*bon*と出現位置

教科書	レベル	n-gram	生起数	位置
教科書1	初級	<i>Ah bon !</i>	1	発話頭
		<i>Bon,</i>	1	発話中
教科書2	初級	<i>Bon.</i>	1	発話頭
		<i>Ah bon ?</i>	1	発話頭
教科書3	初級	<i>Ah bon ?</i>	1	発話頭
		<i>Ah bon …</i>	1	発話頭
		<i>Ah, bon ?</i>	1	発話頭
		<i>Ah bon !</i>	1	発話頭
教科書4	初級	<i>Ah bon.</i>	1	発話頭
教科書5	初級	<i>Ah bon.</i>	2	発話頭
		<i>Ah bon !</i>	1	発話頭
教科書6	初級	<i>Bon,</i>	1	発話中

使用されている位置については、確認された13例のうち11例が発話頭での使用であった。学習者コーパスにおいても*ah bon*は発話頭での使用が87回（学習者コーパスの*bon*全体の41%）と非常に多かった。学習者コーパスに含まれる学生が、どのような教科書を使用していたか定かではないため、初級の教科書の影響があると言い切ることができない。しかしながら、*ah bon*が、初学者が最初に出会う談話標識の1つであると言

<sup>6</sup> 教科書3の*Ah, bon ?*はヴィルギュルを含むが、1-gramの*bon*の疑問文での使用は不自然であるため、ここでは*Ah, bon ?*を2-gramとして扱った。

うことはできよう。

母語話者コーパスでは *mais bon* の使用が 67 回(母語話者コーパスの *bon* 全体の 29%) と比較的多かったが、学習者コーパスでの *mais bon* の生起は 10 回にとどまっている。一方で、*mais bon* の出現位置については、発話中での使用が多いという点において両コーパスで同じ傾向を示している。*parce que bon* や *et bon* は母語話者コーパスでは 21 回生起していたが、学習者コーパスでは前者が 2 回、後者は 0 回であった。

#### 5.4.2. *bon Y*

*bon* の後ろに別の要素が後続する (*bon* が最初の要素となる) n-gram は、学習者コーパスで 5 種類、母語話者コーパスで 8 種類確認されたが、全て生起数は 2 回以下である。これらのうち、両コーパスで共通に使用されていたのは *bon ben* のみである。表 9 は *bon Y* の種類をまとめたものである。

表 9. 両コーパスで見られた *bon Y* の種類と出現数

学習者のみ	学習者と母語話者に共通	母語話者のみ
<i>bon donc</i> <i>bon du coup</i> <i>bon en fait</i> <i>bon euh mh</i>	<i>bon ben</i>	<i>bon alors</i> <i>bon après</i> <i>bon et alors</i> <i>bon et au final</i> <i>bon finalement</i> <i>bon là</i> <i>bon mais</i>

母語話者コーパスでは、*mais bon*、*bon mais*、*alors bon*、*bon alors* のように、*X bon* と *bon Y* という構造の *X* と *Y* に同じ語が現れる例が見られた。一方、学習者コーパスではそのような例は見られなかった<sup>7</sup>。

(8) CD480 – Et ee, c’était trop bon [rires] *mais bon* j’étais malade ce soir-là.

MW480 – Do-mmaaaaaage. (03\_MW\_CD\_100202)

(9) AF328 – [...] Ils ont à peine leur problématique, *bon mais* moi quand j’avais passé les jurys, j’aurai Breton dans le jury donc là. (02\_GP\_AF\_100222)

#### 5.4.3. *X bon Y*

<sup>7</sup> 学習者コーパスでは、*donc* が使用されている例があるが、*donc euh bon* と *bon donc* であり、*X* と *Y* が一致しているわけではないため、ここでは *mais bon* と *bon mais* とは異なる関係として扱った。

*bon* の前後に別の要素が連結する n-gram は、学習者コーパスでは *euh bon ben mh*、*mais bon mais*、*euh ben mais bon euh* の 3 種類である。母語話者コーパスでは *après bon voilà* 及び *mais bon hein* の 2 種類が確認された。しかしながら生起数はいずれの場合も 2 回であるため、学習者に特有な表現が存在するとは言えない。

## 6. 結論

本研究では、日本人フランス語学習者の使用する談話標識 (DM) *bon* にどのような特徴が見られるのかを、3 つのリサーチクエスチョンを立てて分析を行った。

第 1 のリサーチクエスチョンは、*bon* の DM としての使用と non-DM としての使用数である。日本語を母語とするフランス語学習者は、DM としての *bon* が 210 回 (63%)、non-DM としての *bon* が 122 回 (37%) と、DM としての使用の方が多いという結果になった。この結果は、中国人母語話者の研究である Deng (2022) と大きく異なっており、彼女の研究では DM としての *bon* はわずか 13.46% であった。ただし、彼女の研究はインタビュー会話の分析であるため、インタビューという調査形式が non-DM としての *bon* の使用数に影響した可能性も否定できない。

第 2 のリサーチクエスチョンは、*bon* と共起する要素と n-gram の種類である。1-gram の *bon* については、母語話者コーパスでは学習者コーパスのおよそ 2 倍生起していた。2-gram 以上では、学習者コーパスにおいて他の DM よりも *ah bon* が非常に多いという特徴があることを述べた。この頻度が多くなっている一因としては、複数の初級教科書における DM の分析から、教科書からの影響を指摘したが、オーセンティックなフランス語にふれたことによる結果とも考えられる。また学習者コーパスでは、母語話者コーパスと比較して、*euh* や *mh* といったフィラーが *bon* と共起することが多いという特徴が見られることも指摘した。さらに n-gram という観点からは、学習者コーパスでは最大で 5 つの要素との連結が確認された。学習者コーパスで確認された n-gram の種類が、母語話者コーパスのそれとは異なる理由については、母語の影響や英語からの影響など様々考えられるが、本研究における中心的テーマではなかった。この点については、他言語からの影響といった観点からの分析を行う必要がある。

第 3 のリサーチクエスチョンは、*bon* の出現位置である。学習者コーパスでは発話頭が 113 回 (54%) と最も多く、一方で母語話者コーパスでは発話中での使用が 122 回 (52%) と最も多かった。また、発話末での使用については両コーパスにおいて数が少なく、先行研究の結果を追認できた。出現位置の生起数とその割合から、母語話者と学習者で出現位置による生起数の違いはほとんど見られないと言える。

本研究では、日本語を母語とするフランス語学習者が使用する DM *bon* について分析を行った。一定数、*bon* を DM として使用していることは明らかになったが、どのような学生が使用しているのかについては分析できていない。今後の課題として、まず、今回使用したデータを用いて、DM としての *bon* を全ての学生が同じようなやり方で使用しているのか、どのような学生が *bon* をより多く、あるいはより少なく使用するのかに

ついでに分析を行う予定である。また、母語である日本語や教育課程で学ぶ英語における談話標識、言語構造からの影響を含めた分析についても今後行うことが必要である。

#### 参考文献

##### 欧文

- Barnes, B. K. (1995) : « Discourse Particles in French Conversation: (*eh*) *ben*, *bon*, and *enfin* », *The French Review*, 68(5), pp.813-821.
- Chanet, C. (2004) : « Fréquence des marqueurs discursifs en français parlé : quelques problèmes de méthodologie », *Recherches sur le français parlé*, 18(83), pp.84-106.
- Crible, L. (2018) : *Discourse Markers and (Dis)fluency: Forms and functions across languages and registers*, Amsterdam: John Benjamins.
- Crible, L. & L. Degand (2019) : « Domains and Functions: A Two-Dimensional Account of Discourse Markers », *Discours*, 24, pp.1-35.
- Deng, D. (2022) : « *Bon ben enfin fin* in non-native speech: the case of Chinese L1 speakers in Paris », *Actes du 8e Congrès Mondial de Linguistique Française*, 138, pp.1-15.
- Detey, S. & Y. Kawaguchi (2008) : « Interphonologie du Français Contemporain (IPFC): récolte automatisée des données et apprenants japonais ». *Journées PFC: Phonologie du français contemporain: variation, interfaces, cognition*. Paris, Dec. 11-13, 2008.
- Dostie, G. (2009) : « Discourse markers and regional variation in French: A lexico-semantic approach ». In K. Beeching, N. Armstrong & F. Gadet (éds.), *Sociolinguistic Variation in Contemporary French*, Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins. pp. 201-214.
- Ducrot, O. et al. (1980) : *Les mots du discours*, Paris: Éditions de Minuit.
- Gilbert, J. A. (2019) : *The Syntactic Environment of the French Discourse Marker BON*, Master Thesis at The University of Georgia.
- Gülich, E. (1970) : *Makrosyntax der Gliederungssignale im gesprochenen Französisch*, München: Fincke.
- Hansen, M.-B. M. (1995) : « Marqueurs métadiscursifs en français parlé : l'exemple de *bon* et de *ben* », *Le français moderne*, 63, N°1, pp.20-41.
- Hansen, M.-B. M. (1998) : « The semantic status of discourse markers », *Lingua*, 104, pp.235-260.
- Lefeuve, F. (2011) : « *Bon* et *quoi* à l'oral : marqueurs d'ouverture et de fermeture d'unités syntaxiques à l'oral », *Linx*, 64-65, pp.223-240.
- Peltier, J. P. G. & D. L. Ranson (2020) : « Le marqueur discursif *bon* : ses fonctions et sa position dans le français parlé », *Actes du 7e Congrès Mondial de Linguistique Française*, 78.
- Racine, I., S. Detey, F. Zay, & Y. Kawaguchi (2012) : « Des atouts d'un corpus multitâches pour l'étude de la phonologie en L2: l'exemple du projet « Interphonologie du français contemporain » (IPFC) ». In: Kamber, A. & C. Skupiens (éds), *Recherches récentes en FLE*. Berne: Peter Lang, pp. 1-19.

和文

古賀健太郎、秋廣尚恵、川口裕司 (2012): 「Aix 話し言葉コーパスプロジェクト」『ふらんぼー』37, pp.37-54.

コーパス関連 URL

IPFC : <https://cblle.tufs.ac.jp/ipfc/>

Spoken French Corpus (Aix) : [https://www.coelang.tufs.ac.jp/multilingual\\_corpus/fr/](https://www.coelang.tufs.ac.jp/multilingual_corpus/fr/)

(せいみや たかまさ / 東京外国語大学大学院 博士後期課程)

(最終原稿受理日 2025 年 3 月 30 日) (かわぐち ゆうじ / 東京外国語大学 名誉教授)